林間保育について

滋賀縣八幡幼稚園

○林間保育を試るにあたりて

幼稚園の創設者フレーベルが、現時の幼稚園をみたら、どんなにか悲しむことであらう。フレーベルは、幼稚園の目的を定めて、自然の裡に、自然を通して導くものだといつた。しかるに現時の幼稚園は、どうであらう。何れも室内保育が主となつて、恐らく、庭園はせまくるしく、樹木は禿げて、石なく、水なく、動物なく、植物なく、子供の欲する自然物は、殆ど形ばかりのものが少くない。否、幼稚園といへば、通園の關係上、大方、都會の中央にあつて坪何十圓といふ場所であるから、いくら欲しても庭園を得ることは難しい。況んや、せまくるしい家の中に、澤山に幼兒をおしこめて、空氣のきたない、塵埃つぽい裡におくのではまことになげかはしい。しかも、文明は、諸種の效果を齎したが、其の餘弊として、次から次にまして來る刺戟は幼兒にとつて、應接に暇あらしめないのみならず、つひには、神經過敏ならしむる傾向がある。また、消化器病、呼吸器病、貧血症、神經衰弱症等は隨分少くない、實に國家の前途、憂慮にたえざるものがある。

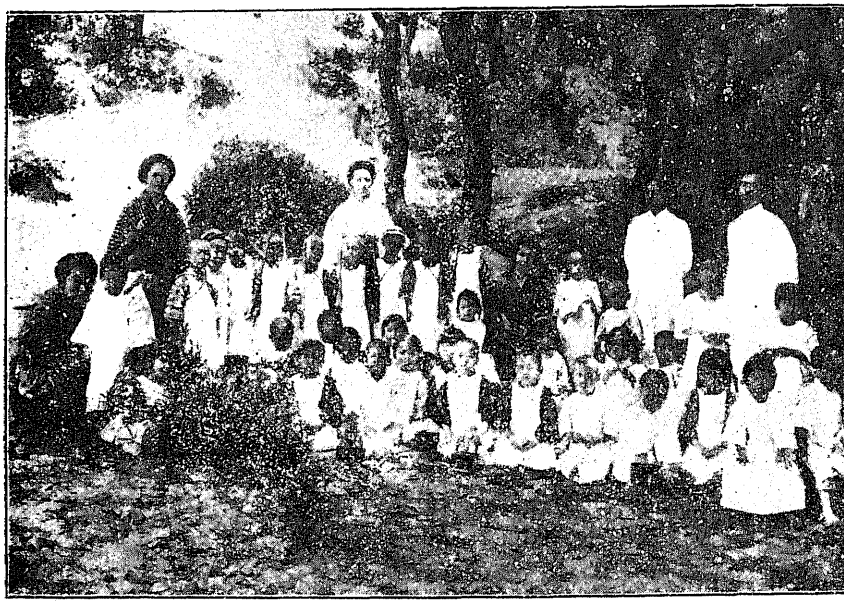
こゝに於て、本園は、次に記すやうな方法で、清潔な空氣、開濶な境界、摘まんと欲する植物、捕へんと思ふ動物、拾はんと努むる鑛物等のみちた天地に、自然の豐裕な林間保育を行ひ、もつて、幾分なりとも、その弊をためたいと思つたのである。

○實際の方法

時日……大正九年七月十二日から同十八日に至る。一週間、午前八時より同十一時三十分に至る。

場所……八幡山中腹田樂山

幼兒……初め、園醫により體格檢査を行ひ、終り



に再び檢査を行ふて比較する。左の條件に該當するもの。

（イ）身體虛弱であつて、林間保育を必要とするもの。

（ロ）神經過敏であつて、靜寂な林間生活を必要とするもの。

（ハ）病後（麻疹或は消化機能不全のもの）久しく恢復せず、林間に於て、充分の運動と、新鮮な空氣の呼吸及適當の飲食物の供給及休息等によりて、健康を恢復せんとするもの。

以上の如くで今回は總員三十七名で、その內、體格よわきもの六名、中なるもの二十一名、强なるもの二名、病後恢復を目的とするもの三名、神經過敏なるもの五名　保姆は片岡氏とし、木下、池田、竹村の諸氏交代し、大西園長、中島園醫等毎日一回視察のことゝした。

保育の方法としては、恩物は全く自然物を基礎とし少しばかりの積木、玩具、洗濯器等を用ひ、ヴァイオリンを以て、唱歌遊戯等を行はしめ、必ずしも一定しない。但し、これらを行ふには、常に幼兒の內的生活の表現にまかせ、自由に、一齊に、個々に機

にのぞみ、變に應じてこれが善導に努めることゝした。實に自然の材料は無限であつて、幼兒を滿足せしめ、嬉々快樂のうちに、其の目的に達し得ることを長所とするのである。

携帶品としては、毛布、積木、石盤、石筆、はさみ、絲色々、雜布、袋、筵、救急用具、鐵砲、まり、シグナルベル。洗濯具。

○一週間後の成績

今、初めての試みとしての、この林間保育に於て、實際に感じたまゝを一言すれば、すべて、人爲の業は如何に周到な用意をもつてしても、著手の最初は、經驗のあさきため、知識の及ばざるため、まゝ、思はざる障碍をおこし、豫期の結果を收めがたいのが常である。而して、今回、菲才無經驗の私共が、我園最初の試みを實施せんとするに當つては、只、專念、幼兒の身體及精神狀態に著目して、最善と信じたる方法を採つたのみである。ところが、各兒とも、豫想以上の發達をなし意外の成績を收め得たのは誠に幸なことで、ことに晴天つゞきであつたことは、實に天運ともいふべきであらう。

わづかに一回の經驗から直ちに結論することは、早計に失するけれども、虛弱なる幼兒の體育には、林間保育が最も有效なりとの確信を得たのである。今每日の有樣をしめせば、先づ八幡神社に參拜して、歌唄ひつゝ目的地に到達し、さて、思ふさへ心地よき環境のうちに、何等の拘束なき自由の天地を見出し、つきせぬ自然界の財源を、右から、左から處置する態度の熱心なさま。背に汗し、顏面熟蘇のそれのごとく、見るからに元氣づいて、これが平素園內に居る同じ子供等とは受取りかぬる活動振りに、「お茶お茶」と、十時頃から、幾度か繰返される言葉こそうれしかつた。清鮮な空氣のうちに、運動をはげしくするために、一杯のお茶に舌鼓うつ彼等の笑顏は天地何物にもたとへられない位に思はれた。

身體的方法の發達は次のようであつた。

一、體重增加は平均一人に付き六十八匁〇三厘但し減少後增加二名、減二十匁（疲勞のためならん）。

二、胸圍增加……平均一人に付二分九厘四毛强。

三、身長增加……平均一人に付一分〇六毛。

四、皮膚赤褐色となり抵抗力を增したるもの五

名。

五、食慾を增進せしもの……七名。

六、健脚となりしもの……二十二名。

七、活動に馴れたること……全部三十七名。

精神的方面としては。

一、友誼を篤うせしこと。

變化ある生活、坂あり、崖あり、花鳥あり蟲あり、苦樂相伴へる環境内にありて、共同生活をなす間、お互にいつくしみあふ感情をやしなひ得たのである。

二、保育者と幼兒との關係密接となり、殆んど母子の情を生じ個性の觀察を便ならしめたことは、多大である。

三、知識啓發はもとより、期するところではなかつたけれども、從來識らなかつた方面の知識を得た。例へば、山に行く途中、山は何で出來たとか、松は初め何處から持つて來たとか、蟬はなぜなくとか、地震で山が出來たのかとか、この草は何といふのかとか、荻はいつ咲くかとか、いろ〳〵のことをいふ。笹舟がうかしたいとて水を探したり、舟は何故うくのかと考へ込む。質問もお話もなか〳〵面白く、時には、三上山を眺めながら俵藤太の百足退治の話をしたこともあつた。

また、山をのぼるのにも、初日は登山三百五足するのに中途で一休してのぼつたのであるけれども、三回目からは、「茶屋が見えた、早く登らう」とて道の時間も早くなり、又、三回目にスベリ山、及び、運動場のある山(高さ二倍位)へ行く幼兒は、十六名で、少し疲勞を感じすぐに下山したのであつたけれども、五日目からは、子供の方から、スベリ山へつれて行つて下さいといひ、行きしもの二十二名で、疲勞も感ぜず、體操棒、ブランコ、スベリッコなどをなして、歸るをいやがる幼兒さへあり、二日前よりも健脚となりしことを認めたのである。

かくのごとく、三十七名の幼兒の生活は、全く世の常の樣とも思はれず、人間界の刺戟が少くて、ただ、大自然のうちに包容されておくつた一週間は、期間としては短かいけれども、これら幼兒にとつては意義あるものであつたことを高調せざるを得ない。